

嫁入り舟

ひゅんひゅんひゅんひゅんひゅん。川面を切りながら、小石が小気味よく跳ねていく。連続する輪っかは次第に大きくなり、キラキラ光りながら消えていった。

「マサ坊、また腕あげたなあ」

いつの間にやってきたのか、秀子姉が笑いながらマサオの後ろに立っていた。秀子姉がマサオの頭をなでようとするので、マサオはあわてて身体をくねらせその手を避けた。

「なんで、逃げっことねえべした」

秀子姉はますます笑って、白い息を吐きながら、雪玉をつくり、マサオに投げつけてきた。秀子姉が陽気になればなるほど、マサオはどんどん気持ちが沈むのだ。いつまでもこども扱いはやめてくれと思う。「やめろお」と不機嫌につぶやくその声は、かすれて、ときどきひっくり返る。そんな自分の声も嫌で、マサオの憂鬱はますますつのるのだった。

「なあ、マサ坊。いつまでそうやってきめっこしてんの。おめがそんなじゃ、姉ちゃん、心配でお嫁にいくよもねえ」

秀子姉がマサオの顔をのぞきこむ。秀子姉は最近、きれいになった。それもマサオは気に入らない。

秀子姉はマサオの八つ年上の姉ちゃんだ。マサオが生まれたときから、忙しい母ちゃんの代わりに面倒を見てきた。友だちと遊ぶときだって、いつもマサオをおぶっていったし、おしめだって替えた。夜は一緒の布団で寝て、夜中、便所へ行くのを怖がるマサオに、眠い目をこすりこすり付き添った。

そんな秀子姉の縁談が決まったのはひと月前だ。隣村の親がつつあまの家に嫁入りするのだ。

姉ちゃんが嫁に行く。うかつなことだが、マサオは一度もそのことを考えてみたことがなかった。姉ちゃんが家からいなくなるなんて、あんまりじゃないか。それなのに姉ちゃんはなんだかはしゃいでいるほどだ。もう勝手にしろと、マサオはずっと不貞腐れているのだった。

それでも楽しみなこともある。マサオの村から隣村へは舟でいく。山が険しいものだから、その方がずっと近いし早いのだ。村には共同の舟があったが、秀子姉の嫁入りのために新しい舟をこさえることになった。親がつつあまの花嫁を古ぼけた舟に乗せるわけにはいかないというわけだ。

船大工のキスケじさまは、舟だって家だって何だって上等につくる。次に舟をつくる時は見に来てもいいぞといわれていたから、マサオはずっと楽しみにしていたのだ。それがまさか姉ちゃんの花嫁舟になるなんて想定外にもほどがあるが、今日もこれからキスケじさまと山へ木を見に行くのだ。

「これならいいあんべだ。百五十年にはなんべな」

キスケじさまは、一本の杉の木を見上げていった。ぶっとい幹が真っすぐに伸びている。「マサ坊、舟はな、まず水に強くねっかなんね。芯の赤いところ使ってこさえっから太いほどいいんだ。まあ、こんだけ太がったら大丈夫だべ」

まるでその言葉にあわせるように、杉の木はぶるぶると身震いをし、木の枝からざざーと雪が落ちてきた。

木を伐り、板にひくと、キスケじさまの舟づくりは、猛スピードで進んでいった。マサオは学校が終わると毎日キスケじさまのところへ通った。舟底ができ、側板ができ、やがて舟首や舟尾ができてくる。マサオは丈夫で堅い板がしなやかに曲がり、美しい流線を形作るのを、息をのんだり、ため息を吐いたりしながら眺めていた。

「いい場所で素直に育った木は素直に曲がんだ。きつく育った木だって、その癖わがって生がせっと、しかもいいあんべになんだわい」

キスケじさまはそうっては側板の曲線を愛おしそうになでた。

花嫁の舟がとうとう完成し、秀子姉の祝言の日がやってきた。

その日は朝早くから、慌ただしく人が出入りし、秀子姉の嫁入り支度が始まっていた。マサオは誰にも会わないように裏山へのぼった。カナカナ蟬が一匹鳴きだし、まわりの蟬たちも一齐に声を上げ始めた。山中にカナカナ大合唱が響き渡る。マサオもカナカナ蟬の一匹だったらよかったのと思う。我慢からあふれ出た寂しさを声に出せたら、少しは楽になる気がした。

裏山からは船着き場がよく見える。そこにはキスケじさまの新造舟が、いまかいまかと花嫁を待っていた。

お日さまがだいぶ高くなり、マサオの腹が鳴り出す頃、船着き場に人が集まってきた。花嫁姿の秀子姉の姿が見える。秀子姉は、周りの人たちひとりひとりにお辞儀をしながら、少し苦勞して舟に乗り込んだ。船頭がもやいを外すと、舟は静かに川面をすべりだした。

マサオは山を駆けおりた。やっぱり姉ちゃんの顔が見たい。

「あれ、マサ坊じゃねえが」

船頭にうながされ、秀子姉が顔を上げると、つり橋の上からマサオが手を振っている。

「姉ちゃーん、幸せになー」

何か月も口をきいてくれなかったマサオだ。久しぶりに聞くその声は、ずいぶん低くなっていた。

「マサ坊一、元気でなー！ ばあちゃん、父ちゃん、母ちゃんをよろしくなー」

秀子姉は力一杯手を振った。

橋の下をくぐった後も、秀子姉は後ろを振り返り、何度も何度もマサオにそう叫ぶ。泣いているような笑っているような秀子姉の白い顔が遠くなり、やがて見えなくなった。

秀子姉の声は、水切りの輪っかのように川面に少しとどまり、そしてそれも消えていくのだった。